

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770073

研究課題名(和文) 1920年代の日本モダニズム文学における「東洋」・「伝統」言説の形成

研究課題名(英文) The formation of the "Orient", "tradition" discourse in the Japanese modernist literature in 1920s

研究代表者

仁平 政人 (NIHEI, Masato)

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：20547393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1920年代の日本のモダニズム文学における「東洋」や「伝統」に関する言説について、他の芸術や学問領域との関係を視野に入れて調査・分析を行った。モダニズムを「都市文化」や「西洋近代への志向」と結びつける通説に反して、日本のモダニズム文学においては、「東洋」や「伝統」を価値化する言説が数多く存在する。この研究では、文芸雑誌や同人誌などの幅広い調査を通して、こうした言説の実態を把握し、個々の事例について、その論理と同時代的な意義を検討した。

研究成果の概要(英文)：This study surveys the characteristics of literary modernist discourses of "the Orient" and "tradition" in 1920s Japan, and analyzes them in the context of other contemporary arts. Contrary to common belief, one can identify many discourses which value positively "the Orient" and "tradition" in Japanese modernist literature. In this study, I ascertain the details of these discourses through a comprehensive survey of literary magazines and coterie journals, and then examine the contemporary significance and internal logic of each case.

研究分野：人文学

キーワード：日本近代文学 モダニズム 伝統の創造 1920年代

## 1. 研究開始当初の背景

日本文学研究の領域において、1920年代以降の日本におけるモダニズム文学(ここでいう「モダニズム」は、特に20世紀初期に西欧を中心として世界的に広がった、革新的な文学・芸術動向のことを指す)は、従来、「近代化」への志向と関わるものとして、また「都市文化」に深く結びついたものとして理解されてきた。近年では、『コレクション・モダン都市文化』(ゆまに書房)など1920～30年代における都市文化に関して多くの資料が刊行されており、それらを踏まえた研究成果も充実しつつある。しかし、こうした状況のもとでは、次の点が十分検討されず等閑視されてきたように思われる。第一に、芸術上のモダニズムは、一般に「リアリズム」に代表される近代の芸術的制度を批判し、また多くの場合社会的なモダニティに対しても抵抗を示す性格を持っており、その点で、非西洋圏の芸術を価値づけるオリエンタリズム的なまなざしとも親和的であったこと。そしてそのこととも関わって、日本のモダニズム芸術が、様々な形で「東洋的(ないし日本的)なもの」を再評価する文脈と結びついてきたということである。

1930年代のモダニズムに関しては、近年、「日本」、「伝統」に関する言説との関わりが諸芸術領域にわたり検討されつつある。だが、こうした先行研究では、1930年代の問題に議論が集まることで、結果的に「1920年代=都市化の時代/1930年代=「日本回帰」の時代」といった旧来の図式が温存されているように思われる。したがって、日本のモダニズムの問題を総体的に追究する上で、従来注目されることがなかった1920年代のモダニズム文学における「東洋」、「伝統」言説のあり方についての詳細な調査と分析が不可欠であると考えたことが、本研究の背景である。

申請者はこれまで、川端康成を中心として、

日本におけるモダニズム文学のありようについて幅広く検討を行っており、特に中心的な課題として、川端のモダニスト的な立場と「東洋」や「日本」、「伝統」に関する言説との密接な関わりについて解明を行ってきた。その研究成果は、拙著『川端康成の方法 二〇世紀モダニズムと日本言説の構成』(東北大学出版会、2011年)にまとめている。ただし、この研究の過程で浮かび上がってきたのは、モダニズムと「東洋」、「伝統」をめぐる言説との結びつきが、単に川端だけに關わる事柄ではなく、むしろ日本モダニズム文学において広範に認められる問題ではないかということである。よって、日本におけるモダニズム文学の問題をより多面的に明らかにする上で、その「東洋」、「伝統」言説とのつながりを広い視野から追究することが不可欠だと考えたことが、本研究を着想した経緯である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、1920年代の日本モダニズム文学における「東洋」、「伝統」をめぐる言説について、調査を通してその実態を把握し、また個々の事例に則して、その論理と同時代的な位相を、他の芸術・学問領域との関わりも視野に入れて解明することである。1920年代の日本モダニズム文学の言説においては、( )「東洋」、「伝統」という概念が肯定的に価値付けられる事例や、( )日本または東アジア文化圏における前近代の芸術・思想等が肯定的に評価される例が、多様に存在している。本研究では第一に、1920年代に刊行された文芸雑誌・同人誌を広く調査し、モダニズム文学(芸術)と関わって「東洋」、「伝統」にまつわる文脈が価値化されている事例を収集する。その上で、個々の言説について、モダニズム文学の文脈において「東洋」、「伝統」の価値化がどのような論理において成り立っているか、分析を行う。ま

たそれらが、その近傍に位置する文学テキスト(小説や詩)とどのような関係性を持つか、テキスト分析を通して解明する。以上の検討は、1920年代の日本モダニズムの状況を、西洋のモダニズム芸術のコードを通して 東洋 の思想・芸術が再発見され(あるいは再創造され) また 東洋(伝統) のコードとの関係を通してモダニズム芸術の文脈が書き直され、更新されていくという、相互的な変形を伴う「文化翻訳」のプロセスとして捉え直すことにつながると考えられる。そしてこうした本研究の視点は、日本における「近代」の文化的経験について、「欧化」と「日本回帰」という旧来の二元論的な図式から離れて再考するための起点にもなるように思われる。

### 3. 研究の方法

本研究は下記の方法で行われた。

( ) 1920年代に刊行された文芸雑誌・同人誌、および主要な文学者の言説を広く調査して、それらの中で、モダニズム文学(芸術)と関わって「東洋」・「伝統」にまつわる文脈が価値化されている事例を収集する。

具体的に調査・検討の対象としたのは、大きく分けて次の二種類の言説である。

(a) 西洋モダニズム文学の交通を通して生み出された、日本における前衛的な文学運動および文学的实践に関わる言説。

「未来派」・「ダダイズム」といった1920年代前半の前衛詩の運動から、「新感覚主義」・「新興芸術派」、また昭和初期のモダニズム詩の動向などを主要な対象とするとともに、岡田三郎の提唱に端を発した「コントノ掌編小説」の流行といった文学現象や、「新感覚派論争」といった同時代の文学論争に関わる諸言説も検討の対象とした。

(b) 西欧におけるモダニズム文学の諸動向の紹介・導入に関わる言説。

「表現主義」・「未来派」・「立体派」・「ダダ

イズム」・「シュルレアリスム」といった前衛的芸術運動や、ポール・モーラン、マルセル・ブルースト、ジェイムズ・ジョイスといった先鋭的な作家の紹介・受容のあり方を調査・検討の対象とした。

以上のモダニズム文学関連の言説を検討して、( )「東洋」・「伝統」といった概念が肯定的に論及されている事例、( )日本または東アジア文化圏における前近代の芸術・思想等が肯定的に価値付けられている事例を収集した。

なお、調査は弘前大学附属図書館の他、主に国立国会図書館・日本近代文学館で行い、必要に応じて古書店から資料を購入した。

( ) 上記( )で収集されたモダニズム文学に関連する「東洋」・「伝統」言説について、それらがどのような論理と同時代性を持ち、またその形成において、他の諸芸術・学問領域の言説がいかなる関わりを持っているか、分析を行う。モダニズム文学は一般に、美術や演劇・映画といった諸芸術や、哲学・自然科学・経済学など多様な領域の言説と交通する越境性を特徴としている。モダニズム文学における「東洋」・「伝統」言説の形成に関して、こうした他領域の文脈がどのように関連しているのか、検討することは不可欠である。( )モダニズム文学における「東洋」・「伝統」言説が、その近傍に位置する文学テキスト(小説や詩)とどのような関係にあるのか、テキスト分析を通して解明する。

### 4. 研究成果

各年度の実施計画に基づき、下記の研究成果を得た。

#### (1) 調査と分析

弘前大学附属図書館および国立国会図書館・日本近代文学館で、1920年代の主要な文芸雑誌およびモダニズム文学に関係する同人誌を調査し、モダニズム文学(芸術)と関わって「東洋」・「伝統」にまつわる文脈が

価値化されている事例の収集を行った。調査対象としたのは下記の雑誌・同人誌である

『赤と黒』、『虚無思想研究』、『近代超克』、『ゲエ・ゲムギゲム・プルルル・ギムゲム』、『新興文学』、『新小説』、『新潮』、『Damdam』、『辻馬車』、『手帖』、『薔薇・魔術・学説』、『葡萄園』、『文芸公論』、『文藝市場』、『文藝時代』、『文藝春秋』、『文章倶楽部』、『文党』、『マヴォ』(五十音順)。この調査を通して、例えば「西洋の没落」という視点のもとで、東洋主義／農本主義とアヴァンギャルド芸術とを結びつける諸言説(生田長江の「超近代主義」および雑誌『近代超克』など)や、表現主義と中世和歌・文人画、あるいはダダイズム／アナキズムと仏教とを結びつける言説、また「コント」(「掌編小説」)と日本古典文学との関連づけなど、モダニズムの文脈における「東洋」・「伝統」言説の諸相を確認することができた。ただし、同時にこの調査で明らかになったのは、こうしたモダニズム的な「東洋」・「伝統」言説が特定の雑誌やグループにおいて集中的に見られるものではなく、あくまで多様な文脈において、拡散的に存在しているという事態である(別言すれば、モダニズム的文脈において「東洋」的・「伝統」的なものを価値づける視点は少なからぬ文学者の間でゆるやかに共有されつつも、それが争点として浮上する局面は1920年代においては少なかったと言える)。この点を踏まえ、本研究ではこうした言説状況の全体を無理に総括することは行わず、あくまで個々の事例(文学者の活動・テキストや論争)に則して、そのありようと同時代的な意義について検討することを試みた。

## (2) 成果発表

論文 「「ダダ主義」と「新感覚派」のあいだ 川端康成「新進作家の新傾向解説」再考」は、川端の「新感覚派」理論と呼ばれる評論を分析することを通して、1920年代

におけるアヴァンギャルド文学言説の論理を、翻訳学の視点を交えながら捉え直すものであった。同論文で提示した日本モダニズム／アヴァンギャルド文学言説に関する視点は、本研究全体にとっても、理論的な前提となるものである。

論文 「「チエホフ」という地下室 尾崎翠「地下室アントンの一夜」をめぐって」では、尾崎翠の最後の小説「地下室アントンの一夜」を分析するにあたり、日本におけるチエホフの翻訳・受容の状況を整理し、尾崎が、1920年代までの日本のチエホフ言説をモダニズム的に書き換えることによって、自らの文学を生み出していることを明らかにした。同論文は、1920～30年代のモダニズム文学と同時代言説との交通について、文化翻訳という観点において検討するという点で、本研究と関わる重要な成果と位置づけられる。

論文 「「新感覚派論争」を読み直す『夜ひらく』評価とモダニズムの複数性」では、1920年代の「新感覚派論争」について、特にポール・モーラン『夜ひらく』をめぐる論争の局面に焦点を当てて分析し、「新感覚派」をめぐる旧来の定説を批判するとともに、生田長江を軸として当時のモダニズム文学をめぐる言説空間について問い直しを行った。同論文は、日本モダニズムが「超近代主義」・「東洋主義」に結びつく方向を含む多面的なものであったことを明らかにするものであり、本研究の主要な成果と位置づけられる。なお、同論文は研究発表に基づき、大幅に加筆修正を行ったものである。

研究発表 「川端康成における心霊学とモダニズム」では、同時代の世界的な「心霊学」の流行を視野に入れつつ、川端文学における独特な心霊学受容のあり方について、モダニズム的な方法という観点を軸に多面的に考察した。この発表は日本モダニズムを他領域の言説の「翻訳」という見地から捉え直すと

ともに、それが「東洋」をめぐる語り結びつくありようを指摘したものである。

研究発表 「初期川端文学における「科学」と身体の想像力」では、川端の「東洋主義的」と見なされてきた言説が当時のポピュラーサイエンスの想像力と結びついていることに注目し、文学テキストが科学の言説を書き換え、資源として活用するありようを検討した。

研究発表 「モダニズムとしての 東洋

初期川端康成を手がかりに 」では、川端康成のドイツ表現主義の受容について、大正期の「南画」をめぐる言説との関係を中心として検討するとともに、以降の川端の「東洋（日本）主義」的言説への連続性について再考を行った。この発表は日本のモダニズム文学と東洋美術をめぐる言説との関係性について解明するという点で、本研究の成果と位置づけられる。なお、同内容に基づく論文「モダニズムとしての 東洋 初期川端康成における「表現主義」受容と大正期美術言説との交通をめぐる」は、『日本語文化研究』第4輯（印刷中）に掲載が決定している（論文）。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計4件)

仁平 政人、モダニズムとしての 東洋 初期川端康成における「表現主義」受容と大正期美術言説との交通をめぐる、日本語文化研究、査読有、4、印刷中、頁未定

仁平 政人、「新感覚派論争」を読み直す『夜ひらく』評価とモダニズムの複数性、弘前大学国語国文学、査読無、37、2016、1-21

仁平 政人、「チエホフ」という地下室 尾崎翠「地下室アントンの一夜」をめぐる、昭和文学研究、査読有、68、2014、64-75

仁平 政人、「ダダ主義」と「新感覚派」のあいだ 川端康成「新進作家の新傾向解説」再考、川端康成への視界、査読有、28、2013、45-58

〔学会発表〕(計5件)

仁平 政人、モダニズムとしての 東洋 初期川端康成を手がかりに、第4回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2015年8月18日、延辺大学（中国）

仁平 政人、初期川端文学における「科学」と身体の想像力、川端康成学会第164回例会、2014年12月20日、創価大学（東京都）

仁平 政人、川端康成における心霊学とモダニズム、川端康成21世紀再読、2014年9月18日、フランス（パリ・ディドロ大学）

仁平 政人、機械仕掛の 宮沢賢治 寺山修司の演劇『奴婢訓』と「(反)書物」の思考、日本近代文学会2014年度東北・北海道地区合同研究集会、2014年8月9日、青森県立図書館（青森県）

仁平 政人、「翻訳」と(としての)モダニズム 「新感覚派論争」再考、日本比較文学会東北支部第12回比較文学研究会、2014年7月26日、仙台市戦災復興記念館（宮城県）

〔図書〕(計3件)

仁平 政人、他、笠間書院、印刷中、川端康成21世紀再読プロジェクト、頁未定

仁平 政人、他、弘前大学出版会、2013、太宰へのまなざし 文学・語学・教育、281（13-46）

仁平 政人、他、弘前大学出版会、2014、寺山修司という疑問符、286（1-10、231-270）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

仁平 政人 (NIHEI, Masato)

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：20547393